

送別の辞

進藤先生を送る言葉

文化学部教授 李 景 珉

山梨県出身の進藤賢一先生は、大学卒業後、北海道の雄大な大自然に魅せられて、1960年網走に中学の教師として赴任してこられた。網走、釧路などの中学・高校で教鞭をとっていたが、札幌大学が創立して間もない頃、人文地理学の教員として迎えられた。以降、丁度40年間を本学に勤続したことになる。専門の講義は明快でわかり易い、大変面白い内容であったと学生たちは言う。学生達にとっては教室での講義もさることながら、学外での、登山であったり、先生の大滝村の別荘での時間が実に楽しかった、優しい温厚な先生との評判がもっぱらだ。図書館長、就職部長、大学法人の理事の職責もまっとうされた。

私は今から20年前に札幌大学に赴任し、進藤先生には同僚として温かく接してもらっている。先生の郷里の山梨周辺には渡来人の遺跡が多く散在しており、先生から「ぼくも渡来人の末裔かも知れない」と言われたことがある。私は国際政治が専門分野であり、日本と韓国との古代の歴史には門外漢であるが、「そうかも知れませんね」と、

うなずいたのだ。

最近是谁もが米国産の牛肉などには注意するようになっていゝ。しかし、私は、15年前に先生から米国の農産物が日本に輸入されている状況について詳細に説明を受けたことがある。それがどういふものであり、日本の農業の現状が如何に深刻な状況にあるかを教えてもらった。そのときの熱弁を今も鮮明に思い出す。私は大いに啓発されたのだ。当時日本では、米国産の農産物の問題に異議を唱えていた人はそう多くいなかった。進藤先生は、人文地理学の専門家としてユタ大学における在外研修中に、カリフォルニア州の農場に調査にも行かれ、その実体および危険性を目の当たりにしてこられたことと思う。

進藤先生はスポーツ・マンでもある。高校教員の時、生徒のスピードスケートクラブを指導し、自らも国体に出場した経験を持っている。クロスカントリースキーでは「スーパーマスター」となる。その指導者としての経験をもっており、今や有名になっているむかしの教え子との人間味溢れる交流をしてこられたようだ。大学の経営にも、教育、社会問題にも関心を持っており、ときには先生の正義感に溢れる「吐露」を聞いたものだ。

新聞作りが大好きであるのも特筆すべきことかも知れない。手書きの教職員の組合ニュースは懐かしい。原稿の依頼と催促は並大抵のことではない。それをよくこなしておられた。当然、時事問題にも話題を広げられ、地球時代の国際社会、国境を越えていく人々の移動の問題に強い関心を示された。韓国の現状や歴史の話が聞かされたこともある。世界の国々に旅に出かける進藤先生といつか韓国の街を歩いてみたいと思っている。